

やつているところの人々と同時にわりあい簡単な研究の組織にたずさわ
る人々を選定して、一連の報告を準備してもらつてそれに基づいてやる
ようにすべきである。……一般的な緒論的論文も準備さるべきで、この
ことは著者の個人的経験に基くべきだが事実の叙述に基きその“国”の
論文に表明された意見に基くべきである。

緒論文は、

- 1) 各国内及び国際的水産資源保存の中の水産研究の位置。
- 2) 水産研究を助けるについての水産行政の効用。
- 3) 水産研究中の行き過ぎた管理行政 (overadministration)。
- 4) 水産研究計画の予算的におこる一般諸問題。

ACMRRは次の諸国に水産研究行政上の論文報告を求めるよう勧告
する。米国、カナダ、ポーランド、ソ連、ノルエー、インド、エスラエ
ル、英国、日本、濠州、フランス、ドイツ、ペルー、アイボリーコース
ト (アフリカ)。

(その他は一応省略)

勧告 25 . Tropho-dynamics のシンポジウム

色々な栄養水準での生産の学力的モデル開発のためのシンポジウム可能
性研究のために作業委員会を。

5. 標識サバ「大室出し」より八戸沖へ泳ぐ

宇田道隆 (東京水大)

東京都水試大島分場指導船「やしお」(13.78t)では昭和38年5月
23日、大室出し(伊豆大島波浮港SE10哩の大漁礁)で大中マサバ

(30~39cm、300~700g) 400尾を標識(9×11mm赤色セルロイド板ビニールチューブ製、尾柄結着)放流、同年10月26日まで23尾再捕、40~121日経過して大室出で9尾(びし釣、底魚1本釣)、大島千波岬沖で1尾、52日経過後(びし釣)、城ヶ島沖で6尾、50~61日経て(はね釣)、洲ノ崎沖で4尾、44~56日経て(はね釣)、外房州沖で2尾、26~44日経て(はね釣)、青森八戸鮫角沖NE/N22度で1尾、9月6日106日経て(千葉県天津亀栄丸1本釣)、おのおの再捕された。伊豆島まわり漁場のマサバが青森県沖まで北上回遊を確認したことは水産資源学上特記すべき成果である。

6. 日本海水産資源の動向

宇田道隆 (東京水大)

昭和38年度日本海ブロック会議が11月2~4日、日水研で開催された。その討議の概要が日本海区水産試験研究連絡ニュース第151号(1963.12)に掲載されているのを抄録する。

- (1) 今年度海況 冬春日本海西部異常低温で各種魚類のへい死・仮死をみたに反し、同海北部では水温平年並か多少低目に経過、その後幾分回復したものの日本海全域極めて低目。
- (2) マサバ (日本海) 1959年以降組成急変、高令魚減少著しい。サバ漁場特に越冬場北偏。近年若令群の出現状況からマサバ資源今後増加の傾向にある。
- (3) マアジ 1953年ごろから爆発的に出現した豆アジは近年減増